

親友に初めての春が来た。

Gは最近同じサークルのT君から告白を受け、いまは相思相愛

「私はね、平井堅みたいな、大人なカンジの人がいいの。同年はちよつとね」とか言つて、ほとんどの男を「ありえない」のひと言で片付けていたGの初カレ発覚である。

周りは、いつせいに身を乗り出して、「えっ、どんな人?? プリクラとか、見せてよ!」

「こんなカンジの人なの……」

「……へえ」

……あの、なんだか優しそうな人だね」

一瞬、静まり返つたのも、一同はT君に共通の思いを抱いていたからだ。メガネにマフラー、風になびく髪型そしてつややかな白い歯。

「あの人に似ている!」

「ヨン様ってどこがいいの? はまる人の気がしれない」

かつてそう言つて友人を激怒させたのもGだった。あれは何? さっそくその場でGの彼は「T様」と命名された。何度となく彼女の話に登場するので、仲間内では勝手に長い付き合ひの友達のように扱われているT様だが、Gに成り代わつて「あ

りがとう」と言いたい。Gは、T様との出会いでいろんな面で変化した。

ブラックGと呼ばれるほど黒い服ばかりだったのがパステルカラーのツインニットを着て、カラオケでは「歌舞伎町の女王」から大塚愛の「さくらんぼ」を熱唱するようになった。

メールの返信も、ちゃんと句読点があるうえに、必ず絵文字が付いてくるようになった。確かにここまで以前のままでも「個性的」なだけで悪くはないが、

なにより、何かをがむしゃらにがんばっている人を、バカにするような言い方をしなくなった。

「T様が、Gの本来の女の子らしいところを引き出してくれているよね」

だからT様に感謝、感謝である。

「優しくしてあげないと、そのうち他の子にT様取られちゃうよ」

最近Gは挨拶がわりにこう言われている。そのたび彼女は、

「大丈夫。T様は私にメロメロだからっ!」

変わらぬ女王の笑顔でサラリとかわしている。

(B)

吉祥寺のもんじゃ焼き屋にて。女子大生らしい2人連れが入ってきた。2人が注文したのは、「食べ放題コース」。「時間無制限」というのがこの店のウリなのだ。まずは、韓国風もんじゃと、麻婆豆腐もんじゃを注文し、おしゃべりを始めた。

「この前テレビで見たんだけどね、人生には、いいことと悪いことが半分半分、プラスマイナスゼロになつてると。なんか、妙に納得しちゃった」

「勝ち組とか負け組って言ってるけど、そんなのはないのかもね」

お待たせしました、ともんじゃの種類が運ばれてきた。

「あ、ありがとうございます! えっと、これを、まずどうすればいいんだ?」

「私やるよ」

1人が慣れた手つきでもんじゃを鉄板で焼き始めた。

「それでね、そのテレビでは、舌切りスズメの話を出してただけで、スズメを助けたおじいさんと舌切りばあさんのお話」

「うん、いい思い出分、悪いこともあるわけだ」

と語るうち、「なんかいい匂いがしてきた!! もういいんじゃない?」と、韓国風もんじゃを皿にとりわけ、食べ始めた。次は何食べる? と相談して、またさっきの話に戻った。

「シンデレラもさ、継母たちにいじめられてたのはマイナスでしょ。でもそこでやなめにあつた分、王子様と結婚するっていう、プラスのことにいき着くわけだ」

「逆に、継母たちはイジワルしてたから、その分マイナスなことがきちゃうんだ」

話の合うふたりである。

店員がそばを通りかかった。彼女たちはお好み焼きのミックスト、ナスチーズもんじゃを注文する。

「じゃあ、王子様は?」

「ああ!! あれは勝ち組だね。いい思い出してないね」

笑い声が、雑音の中にも際立った。

「ねえ、ねえ。あれおいしそうじゃない?」

おなかも、お話も、時間無制限で続くかのような、もんじゃ焼き屋の午後である。

(琴)



ブラックGに春が来た
メガネにマフラーなT様

悪くはないが、なにより、何かをがむしゃらに

もんじゃ食べつつ
語り合う「人生の真実」

「逆に、継母たちはイジワルしてたから、その分マイナスなこと

ふ
るさと・鳥取への帰り道、A君は思い立って、名古屋で新幹線を降りた。いま一番元気がいい、といわれる町並みや土地の空気に触れることもさることながら、一つ長年の夢があったのだ。万博ではなく、「櫃(ひつ)まぶし」

これを食ってみたい、という小市民的グルメの欲求である。ウナギ屋ののれんをくぐった。店は満席。相席でも、がまんするか。えっ、1200円もするのか。ま、これも仕方あるまい。A君はこどももひとりごちた。

「はい、お待ちどうさま」と、お盆のセツトが運ばれてきた。おひとつのふたを開けてみれば、金糸卵を通して、蒲焼きのウナギがちよろちよる見える。小さく刻まれたやつが。なにか、ウナギをケチったような細かさである。それでメシにまぶして、お椀に3杯、ペロツと平らげたのだった。ふと相席のカップルを見れば、薬味をまぜ、その後でお茶漬けにしていた。ゆつたり、楽しげに。

そうか、この土瓶蒸しのような急須は、茶漬け用であったのか。グビグビ飲んで、後の祭りである。

1杯めは、そのままメシにまぶして。

2杯めは、薬味のワサビかなんかと一緒に。3杯めは、お茶漬けにすれば、3度おいしい。

「レストランのどん××にも、そう書いてあるじゃん」と後日友に笑われたものだが、A君は茶をぐっと飲み干して、ものも言わずに店を出たのであった。

一場の恥は棚にあげて、「名古屋文化だなあ」とA君は講釈を始めた。歴史にはちよつとうるさい。

江戸期になって中仙道・東海道が整備され、伊勢湾を取りこむことで、名古屋は重要な位置を占めるようになった。陸路、海路からの人と物の往来しげくなり、江戸と上方からともどもの影響を受けた。が、そのまま受け入れるのは「かたたるくていかんわ」という反骨精神が名古屋独自の文化風土を育てたんだよと。

食においても、煮込みうどんの八丁味噌しかり、東海地方ならではの「たまり醤油」もそう。「櫃まぶしの味付けも、たまり醤油仕立てだった」そう。もうちよつと味わって食えばよかったなと、A君の「胃袋の悔恨」はやけに深い。

(岩)



毎日イライラするところが多いのだ。いつも怒っている。

「まったく東京はイヤよねー、みんな自分中心で、他人に干渉しないのはいいけど、冷たいって感じだよ」

なんて、都会の人たちを軽蔑してきた私だが、じつは東京在住17年で、気づけば自分こそがそのセカセカ都会人そのもので、毎日何かにつけイライラしているのであった。

電車の中ではワンカップで一杯やってるおじさんにムカツ、満員電車で2人分席をとってるひとにムカツ、一生懸命鏡を見て化粧してる女の子にムカ!

道路では車の窓から捨てタバコにムカツ、車道で自転車を走らせる(合法です)私にクラクションで警告、にムカツ。

映画館では、上映中なのに、おしゃべりし続けるカップルに……。あげく、仕事休めの酒にほろ酔いの父親や、TVを見ながら寝転がってせんべいをかじる妹やら、罪なき人々にまで腹がたつてくる始末。キリキリしちやつて、われながら醜いっただらありやあしません。でも皆さんもこういう経験おありでしょう?

イライラ解消法

それは「想像力の問題」

そんな自分にヘキエキしていたら、ふとつけたTVでこんなことを言っていた。それは色と精神に関する話で、色にも波動があり精神状態を左右するのだが、灰色や黒は葬式などの悲しみの色であるから、そういった色が多いと落ち込む原因のひとつになる、そういう時は想像力を使って灰色のオフィス街もパステルカラーだと想像すれば精神的にも安らぐという内容だった。

なるほどね、と感心した私はそこからヒントを得て、私を落ち込ませるものたちを想像力で変化させる努力をした。ワンカップで一杯やるおじさんにはヤクルトを持たせてみたら、なんだかかわいいなあと思えてきた。化粧をする女の子には、電車が急ブレーキをかけて口紅が思い切りはみでる想像を試してみた。すると、おかしくて腹がたたなくなった。クラクションを鳴らす人には、とびきりの笑顔でかわしてみたら、捨てタバコには、彼の黒くなった肺を想像してみたら、少し気がおさまった。

単純なタチなんだね、とミもフタのないこと言わないで。豊かな「想像力の問題」です。

(菲)

「本 当の友人とは、犯した過ちを指摘してくれる人」

前米大統領ビル・クリントン氏は、学生の質問にそう答えた。先月開催された、クリントン氏の著書『マイライフ』出版記念フォーラムの中でのことだ。それを聞いて、ふと思った。「大学で、本当の友人はいるのかなあ」

大学生生活も2年目を迎えた身にとつて、あるいは多くの学生にも耳の痛いことではないか……。

彼の言葉が妙に腑に落ちるなあ、と思いながら自宅に戻り、『マイライフ』を開くとこんなくだりがあった。「縁故や裕福な家庭をもたなくても、因襲的な南部の立場をとらなくても政治家になれると考えていて、アメリカはこういう望みを抱くことが可能な国ではないだろうか？」

言葉通りに、彼は一代にして世界の頂点に上りつめた。自伝を読めば読むほど、その強みは「人とのつながり」であったと感じるところがある。

その彼が語る友人論、聞いてナットクである。

高校時代を振り返ると、本当の友人と呼べる仲間はできた気がする。北は東北、南は九州と、全国各地に無料宿泊所ができ、旅行が好きなボクにとつては便利なこと限りなし(笑)。

大学生になり、クラス、サークル、バイト先……色々な場所で人と出会う機会

会はこれまで以上に増えた。一人ひとりとの出会いを大切にできたか。クエスチョンマークが頭をよぎる。でも、それが学生のドライな人間関係なのか。学生は、昔も今も「孤独」を味わう時なのか。「友人の幅を制限しないことが大切だ」

これも、クリントン氏

「つながる」大切さ クリントン講演で ボクも考えた

が話した、胸を刺す言葉。どうしても、友人は自分に似た人になりがちだ。変なバイアスをかけ、自分から出合いを遠ざけている、気がする。それに、外見で人を判断しちゃいけないな、と思いつつも、異性を外見で品定めをしている自分がある。

「あの子、カワイイ」なんて(笑)。まあ勝手な思いこみですが。新しい出会いがあふれる「春」

—— 楽しさあふ

れる新生活に胸を躍らせる新入生も多いだろう。大学生活を1年経験したセンパイとして、偉そうなことを少しだけ言わせてもらえば、

「つながる」大切さ
ということになる。

最近、浪人していた高校時代の友人が、医学部

に合格した。法学部で司法試験を目指すやつもいる。のちのちわが身に問題が起きても、これで安泰……。

自分でできることは限られる。でも、そのかわりに「つながる手」があればいいのではと、最近楽観的に考えている。どんなに生きても100年やれることは限られている。それなら、自分のできないことをできる友達を増やしたほうが、人生充実するだろう。

クリントン前大統領の話聞きながら、谷川俊太郎の「春に」という詩の一節が思い浮かんできた。

「まだあったことのない すべての人と 会ってみたい 話してみた」

明日は、どんなステキな出会いが待っているのかな。

(創)

